

卒業生諸君に寄せる

(平成28年度卒業証書授与式式辞より)

鳥海山の残雪 陽光に映え、子吉川の流に春色ひとしおのこの佳き日に、秋田県教育委員会 秋田県教育庁 教育次長 佐藤雅彦様、同窓会長 村岡兼幸様をはじめ、多くのご来賓の方々の御臨席を賜り、また、保護者の皆様の御参列を得まして、平成28年度秋田県立本荘高等学校卒業証書授与式を挙行できますことは、まことに有り難く厚く御礼申し上げます。

ただいま、卒業証書を授与されました全日制231名、定時制8名の皆さん、これまでの3年間、あるいは4年間、右文尚武、質実剛健、玲瓏同氣 3つの校標のもと、勉学に専念し、部活動や生徒会活動に青春の全てをかけ、大きな成果を上げてきました。さらに、定時制にあってはもう一つの校標、 働学一体の実現に向けて、厳しい職場に身を置きながら、心身の錬磨に務めてきました。

その努力が認められての卒業です。この卒業は皆さん自らの手で成し遂げた一つの輝かしい栄誉です。どうぞ大いなる誇りとしてください。そのことに、私たち教職員一同は、深い敬意を表します。

その一方で、共に学び、支え合った友がいます。皆さんを守り、育ててくれた保護者の皆様をはじめ、同窓会や地域の方々、本高の先生など、多くの方々の教えや励ましがありません。こうした方々への感謝の心を忘れないでほしいと切に思います。

さて、君たちが生きるこれからの時代は、人工知能(AI)の飛躍的な進化、グローバル化の進展、高度情報化社会、そして、少子高齢化の到来により、世の中の流れが予想よりもはるかに早く進む、予測困難な新しい時代、といわれています。

このような予見はすでに40年ほど前に登場しております。アメリカの未来学者アルビン・トフラーの予想です。それは、農業革命、産業革命に続く第3の波、情報革命のことであり、情報革命による全く新しい文明が始まるというものです。

さらにその後、アメリカの経営学者ドラッカーは、IT革命が、これから長く続く時代変化の要因になると断言し、社会は知識社会、競争社会になると主張しています。

我が国でも、今後は知識基盤社会となり、就業形態の多様化や構造の転換が生じると言われて来ました。

さらに、今後があまりにも予測困難なことから、今、学校で学んだことが、将来社会に出たときに、そのままでは、通用しなくなるのでは、という危惧も出てきています。

これからの時代、問われているのは自分が持っている知識や技術で何ができるかということ。すなわち、活用力です。学校で学んだこれまでの知識や技術を再構成したり、修正したりして、組立て直した知識・技術でもって新たな可能性を見出すような発想力、批判的思考力、さらには、チームとして協働しながら新しいものを創造していく力を身に付けなければなりません。

このような社会に、飛び込んでいく皆さんに、心構えとしてどうあればよいかについて、少しでも助力になればと願いながら、2つのこととお話し、私からの臆と致します。

1つ目は、「学び続ける力」です。

先ほど紹介したトフラーは、こうも言っています。「21世紀の文盲とは、読み書きできない人ではなく、学んだことを忘れ、再学習できない人々を指すようになるだろう」。そして、ドラッカーは、「21世紀に重要視される唯一のスキルは、新しいものを学ぶスキルである。それ以外はすべて時間と共にすたれてゆく。」と言っています。二人の言葉は、学び続ける人だけが、変化を見極め、自己修正しながら社会に対応できるということを意味していますが、これは、現状を冷静にみれば、全くその通りであると考えられます。

幕末の儒学者佐藤一斎は、

「少(わか)くして学べば即ち壮にして為すことあり、

壮にして学べば即ち老いて衰えず、

老いて学べば即ち死して朽ちず」

(若くして学べば、大人になって世のため、人のために役に立つ人間になる。壮年になって学べば、年をとっても衰えることなく、いつまでも生きいきしていられる。年をとって学べば、死んでも朽ちることなく、その精神は永遠に残る。)

と、説き、学び続けることの大切さと人生のありようを見事に論じています。

これから訪れるであろう変化の時代において、生き残っていくのは、学び続ける

力のある者のみ、このことを決して忘れないでください。

2つ目は、言葉を大切にすること、です。言葉にはパワーがあるとよく聞きます。実際、言葉によって勇気づけられたことは誰にでもある経験でしょう。

言葉を適切に使うことは、良好な人間関係を築きます。また、言葉を正しく使いながら協働することは、知恵や思考を高め、人間としての成長を促します。

すなわち、言葉によって知識が知恵に昇華し、人は成長するのです。ドイツの哲学者フィヒテは、「人間によって言葉が造られるよりはるかに多く、言葉によって人間が造られる。」と言っています。今こそ、この言葉を胸に刻むときではないでしょうか。

皆さんには、言葉を大切にすることで、自分の考えを確かなものにするとともに、他と協働しながら人間として成長して行ってほしいと思います。

卒業という新たな出発点にあたり、皆さんに、「学び続ける力」と「言葉を大切にすること」の二つをお話ししました。この二つを生活基盤の一部にしてくれることを願います。そうすれば、本高の校標のもとに、がんばってきた君たちですから、どんなことが起ころうとも、乗り切れるはずです。大丈夫です。期待しております。

さて、皆さんには、機会があるごとに願いを込めて俳句や短歌を紹介してきました。卒業に当たり、正岡子規の短歌を送って、私から最後の激励と致します。

真砂なす数なき星のその中に我にむかひて光る星あり Repeat

砂浜の砂のように数限りなく存在する星ではあるがその中に、私に向って光っている星がある。

これからの皆さんにはいろいろなことが起こるでしょう。うれしいことや成功ばかりではありません。失敗や、時には落ち込むことだってあるでしょう。そんなときにこの歌を思い出してほしい。結核に冒され、いつ死が訪れるかもしれないという厳しい状況にありながら、志を失うことなく、持てる力の全てを注いで正岡子規は不滅の業績を残しました。子規をしてそうさせた「星の光」の力を君たちにも信じてほしいと思います。

人間は何かを成し遂げようと思ったとき、必ずひとりぼっちになるものです。その孤独が人間を崇高なものにします。悲願成就に至る道はつねに孤独なものですが、ふと周りを見れば、あなたを心から応援し、励まし続けている人がいます。必ずいます。「我にむかひて光る星あり」とは、そういうことと思いたい。

また、こうも思います。今見ている星の光は、今現在の光ではなく、何年も前の過去から来た光です。我にむかいて輝く星の光とは、もしかしたら頑張った過去の自分からのエールなのではないか。過去の自分が、あんなにがんばったんだから大丈夫だよ、と今の自分に言っている光なのだと。

皆さんには、無限に瞬く星々の中に、少なくとも一つだけは、自分のためだけに輝く星があることを信じ、自分の道を切り開いて行ってほしいと思います。

最後になりますが、本日ご臨席のご来賓各位におかれましては、今後とも本校卒業生に対しまして一層のご支援ご指導を賜りますようお願い申し上げます。

また、保護者の皆様には、お子様の栄えあるご卒業を衷心よりお喜び申し上げますとともに、過ぎし3年間の御労苦とお子様にご注がれましたご慈愛に対し、深甚なる敬意と感謝を表します。これまで本校に賜りましたご理解と御協力にも感謝申し上げますとともに、今後も、お力添えをお願いする次第です。

それでは、卒業生の皆さん、皆さんの幸多き未来を心から祈りつつ、式辞といたします。

(完)